

## 観光地の博物館

飛騨民俗村学芸員 小山 司



当館のある高山市は観光地としてよく知られていますが、近年では国際観光都市宣言も致しました。従って、例えば市内の主だった観光施設の案内標示板や、英文による説明板等の整備も逐次進められています。

そのような中で、観光目的に適う博物館的な施設が個人・公営合わせて15館近くあります。また、三町筋の「古い町並」は、所謂伝建地区として保全され、歴史豊かな街の雰囲気をもっと盛り上げています。そしてこれらは、飛騨高山イメージが外部経済的効果を生み出す点を考えると、観光依存度の高い地域経済の当地にとって、こうした博物館は不可欠なものだと言えます。

しかし一方、博物館の本来のあり方というか、姿勢論の立場からは、観光的・商業的色彩の強い博物館に対しての疑問視もあります。それでは、観光地にある博物館は、どのような態度でその事業に取り組むべきでしょうか。

観光地とは、自然・歴史・文化等に他地域にないユニークさを持ち、その個性の強さ、表情の豊かさが旅人の心を魅き付ける地域だと思います。そしてその旅人の心情は、普段私たちが魅力的な人と友達になりたいと願うのと同じで、ごく自然なものでしょう。

しかし、何を求めて旅人は来るのでしょうか。この辺りのことを、私たちはしっかりと認識しているのでしょうか。なぜなら、そのことは何が

個性豊かで、魅力的な生活、文化、地域なのかを考えることであり、そこに博物館の存在の意味が見出せると思われるからです。

私見では、人は「出会い」を求めて来るのだと思います。普段の生活を離れて、見慣れぬ自然や生活文化に触れ、日常見失いがちな自然に対する畏敬や先人の文化・精神に対する尊敬の念を再認識するのだと思います。それを通して、旅人は自分の生活や住んでいる地域が見えてくるのだと思います。

同時にこれは、観光地で生活する人々にも影響を与えます。外からの目によって、地域の文化も鍛えられ、磨かれるからです。

そのような意味で、私にとって「観光」とは「出会い」の創造であるべきだと考えます。

そしてそこでの博物館とは、地域の自然、文化、歴史などを凝縮した「地域の鏡」と言えるもので、住民自らの姿を映し出すと同時に、観光客自身もそこで自分の姿を発見できる場なのだと思います。つまり、他者との出会いと、それを通しての自己との出会いの空間として、積極的に外に開かれているべきだと思います。

そのために、たとえ観光的色彩の強い博物館でも、鏡を磨き、自己を見つめるという意味で、調査研究及びそれに伴う教育普及活動は不可欠であろうと思います。そしてそれに地域住民が積極的に参加できる体勢が整うなら、過去に蓄積した魅力の上に更に魅力的な文化創造がなされ、根源的な観光資源が蓄積されてゆくと考えます。そしてこの責任の一端を、博物館で働く職員の一人ひとりが担っているという認識がとても大切であると感じます。

# くすり博物館の未来構想

内藤記念くすり博物館

館長 青木 允夫

くすり博物館が開館して17年、当初は資料の収集に専心してきたが、最近では「役に立つ博物館」を模索してきた。一昨秋新館がオープンし、展示面積も大幅に増加し、来館者数も年間4万人近くになった。さらにこの4月からは学芸員の数も4人となる。

薬はわれわれにとって最も身近なものの一つである。薬を通じて健康科学に貢献する博物館として、本当に役に立つ博物館を目ざして、幾つかの目標を設定しているので、それを述べてみたい。

その第1は学芸員の1人を展示室に常駐させ巡回させることである。来館者に話しかけたり諸道具の使用を実演したり、カロリー計算のパソコンを説明したりして、より理解を深め、興味を抱かせるよう手助けをするようにしたい。付きっきりの案内とは別に、このような遊軍を配置することによって、展示資料が身近なものとなることを期待している。一方、学芸員にとっても、来館者から教えられることもあるだろうし、キャプションが適切かどうかなど反省、改善する点もでてくるなど利点も多い。

第2は収蔵庫の活用である。展示室に展示されている資料の数は限られている。研究者など特に希望する人に収蔵庫を公開するための作業を現在進めており、今年中には完成させたい。全資料をジャンル別に格納し、かつジャンル別のカラー写真アルバムを作製し、どんな資料があるか一目瞭然とする。

収蔵資料目録も第2集として「くすり広告」（写真付）の刊行作業に今年から着手する。

第3にレファレンス事務の充実である。わが国唯一の総合的な「くすり」博物館ということで、マスコミを始め、いろんな人からの問い合わせが年間百件を超える。その一つ一つに迅速

かつ格的に応答するためには、日頃の研鑽に加え、コンピューターによるデータの蓄積が重要である。現在の機種では容量不足になってきたので、明年には大型化を予定しその選定に入っている。

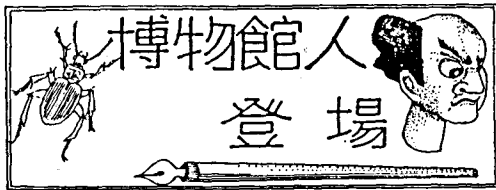
第4は図書室の充実である。昭和65年を目標に附属図書館棟を本館に隣接して建設する予定である。開架式、パソコン導入で検索を容易にし、かつ快適な環境で閲覧できるようにしたい。図書目録もそれまでに刊行する。

第5に工場見学との連繋である。博物館を見学後、希望者を製薬工場に案内することになっているが、館内を案内した学芸員がそのまま工場も案内するように連繋するようにしたい。そのためには学芸員がさらに「薬」に関する知識を研修することが急務であることはいままでもない。

数多くある資料が「ガラクタ」でなく、資料として活用されるよう、縁の下の部分の補強に専念していく方針である。

一方、附属薬用植物園も同様である。園内には学術的に貴重なものも少なくないが、話題性に富んだものに重点を置いて栽培していく方針である。珍しい香辛料植物や、子供たちの「ふれあいコーナー」（さとうきび、なんきんまめ、わた、うこんなど）を充実させる。担当者も園内を巡回し、来館者に接するように努める。薬用植物の知識の啓蒙はもとより、野山や路傍でその植物を通じ親子の会話が広がっていくような知識、話題を提供したいと考えている。

自戒の意味を含め、私どもの博物館構想を述べさせていただいた。会員諸先生のご批判、ご指導をいただければ幸いである。



岐阜県美術館学芸員

## 古川秀昭氏

画家として 学芸員として

岐阜県庁の北側、岐阜市宇佐にある岐阜県美術館は、開館から6年目をむかえました。

ゆったりとしたスペースと、木々の緑と建物の調和が、心をなごませてくれます。

美とのふれあい、美と対話する県民のやすらぎの場である岐阜県美術館に、学芸員の古川秀昭さんをお訪ねしました。

美術館学芸員という顔と、もう一つ、モダンアート協会々員の画家という顔ももっていらっしゃる古川さん。美術の世界との出会いをうかがいました。

「母がしょうぶでなかったので、幼い頃から医者になり、母を助けようと思っていました。そのため勉強も、もちろんしていました。ところが、私が高校三年の時、母が何気なく油絵の具をくれたのです。その絵の具のにおいをかいだ時、それまで自分がまったく考えたこともなかった絵の世界があることを知りました。それは私にとって、思いがけない大きなよろこびでした。」

その時の絵の具のにおいがきっかけで、古川さんは医学から美術へと、まったく違う道を選び、歩きはじめたそうです。

「人の思いがけないよろこびというものは、それまで、自分がつみあげてきたところではなく、まったく偶然に、思いがけないところにあるのです。そのよろこびを探れる心のひろがりの方が大切ですね。」

美術館とはどのような場であるとお考えですか。

「美術館というのは、来館者の期待に答える場でなければいけません。県展や、郷土作家展を催すことも必要でしょう。しかし、本当の期待というのは、来館者自身が、思いもよらない、考えてもみなかったものだけけれど、本当に見た



作品「祝された小さな静物 '87」

かったもの、欲しかったものはこれだったんだという体験、出会いをすることです。そういった出会いをすることで、一人ひとりの生きている自覚をも変ることでしょう。美術館は、人間を変革させる場です。いたくもかゆくもない美術館ではだめです。作品と出会う、10年後にも、まだその人に響きつづけるようなもの、体験を提供するのが美術館の責任ですね。」

画家としての古川さんは、どんな方でしょう。

「夜の10時からが、自分自身の時間ですね。本を読んだり、筆をとったりします。最近では、『祝された静物』を作品のテーマにしています。誰も気がつかないような小さな生き物、花などが、モチーフですね。」

現在は春のモダンアート展に出品する作品を制作中とのこと。

「美術館の学芸員である自分と、画家である自分は、明らかに考え方も違います。しかし、どちらも自分自身です。そのあいまいな立場に自分をおくことで、美術史家も、画家も気づかなかった何かをみつけられるのではないかと思います。」

また、休日には気分転換に海釣りもなさるそうです。

古川さんは、随がとても静かな素敏な方でした。（内藤記念くすり博物館 林 裕子）

# 海外博物館を見て

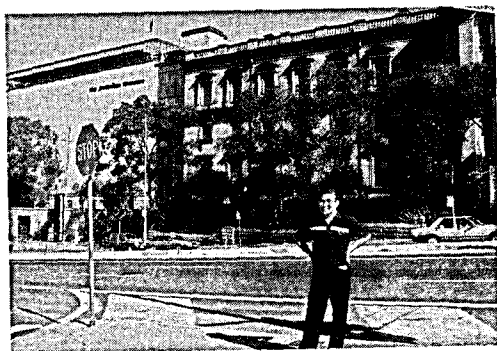
— オーストラリア・ニュージーランド —

岐阜県博物館学芸員 国光正宏

9月21日から10月6日までの16日間、岐阜県教職員海外研修派遣団の一員として、マレーシア、オーストラリア、ニュージーランドの教育視察をする機会を与えられた。

“国際社会の中に生きる、人間性豊かな子供を育てるための教育の在りかたをさぐる”という視察テーマのもとに、訪問国の教育事情を見聞し理解するとともに、教育・文化施設等の視察を体験することができた。

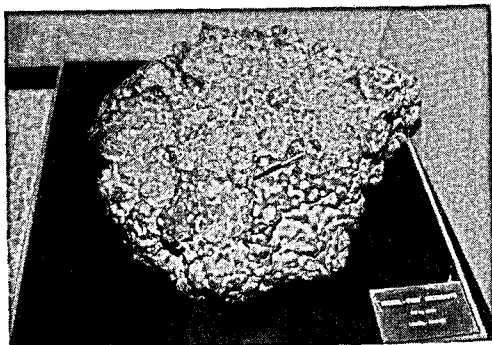
この日程の中で、オーストラリア博物館とオークランド協会博物館（ニュージーランド）の二つの博物館を見学することができた。時間的制約と語学力不足での見学なので、充分な把握



オーストラリア博物館前にて

ができないままでの紹介であるが、なんらかの参考になればと思う。

(1) オーストラリア博物館（シドニー市）：オーストラリア滞在2日目の午後、やっと自由時間がとれた。あらかじめ、日本博物館協会事務局よりいただいた資料の中で、是非訪ずれたいと思っていた博物館であった。同僚のW先生と二人で片言の英会話をたよりに辿り着いた博物館は、威風堂々とした建物であった。玄関脇にドイツ語、フランス語などと並べて、“ようこそオーストラリア博物館へいらっしゃいました”と日本語で書かれていた。このひとこと的心くばりに対し、心のごちむ思いがした。

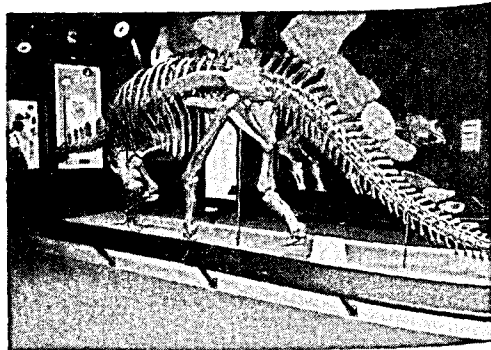


隕鉄（鉄・ニッケルの合金）

この博物館は、有袋類やオーストラリアの特異な自然、原住民の生活史などを中心にしたものが展示してあり、この分野でのオーストラリアの草分けである。

受付には、見識豊かな男性の職員がおられた。持参した県博物館の種々の資料をも交え、お互いに片言の英語と日本語を用いて、博物館の概要について話し合うことができた。私はかねがね、博物館を訪ずれる人が最初に出会うのが受付の人であり、それゆえ、博物館の顔であると思っていたが、この男性職員の見識豊かな対応に接し、意を強くした。

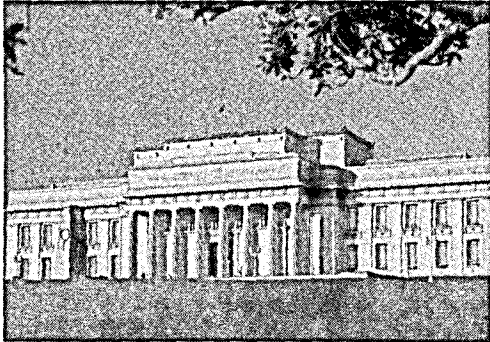
時間の制約があるため、二階の鉱物展示場と隣室の化石展示場を重点的に見学した。展示場までは、キュレーターの方に案内していただけたが、日曜日で観覧者が多かったことと、英語



ステゴザウルスの複製標本

が苦手であることから迷惑をかけてはと思い、解説を遠慮した。最近、資料の保存、研究及びそれを普及・啓蒙する力も含めて、学芸員の資質向上が話題になっている。国際化社会に対応できる語学力も是非必要なこと痛感した。

鉱物展示場には、オパールをはじめとして、



オークランド協会博物館

五千種類以上の鉱物が整然と展示してあった。豊富な展示資料に接し、県博物館の現状を考るときは、まことに羨しい限りであった。

化石展示場には、アローザウルスの頭骨をはじめとして、実物、複製の種々の恐竜が展示してあった。以前から外国の博物館では、埃りを避けるべきものは別にして、開放した展示がされている場合が多いと聞いていた。実際にそのような展示に接し、公共物に対して国民共有の財産であるという考えが行き届いていることを痛感した。このことについて、日本国民に是非浸透させて行かなければならないことと思う。

(2) オークランド協会博物館(ニュージーランドのオークランド市)：オークランドは、ニュージーランド北島の北部にあるこの国最大の商工都市で、1865年までニュージーランドの首



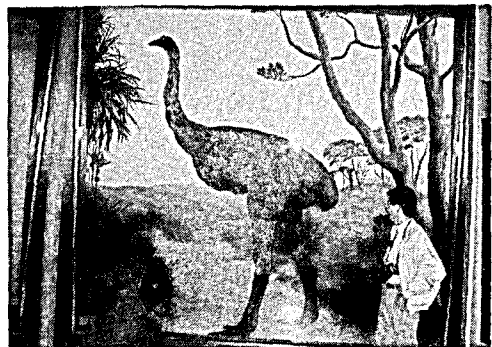
カウイの木で作られたカヌー

都であったことから、大学や教会、数多くの公園などの文化施設が整っていた。

この博物館は首都であった1852年に創立されたもので、原住民のマオリ人に関する豊富な収集品があることから有名である。

館内には、カウイの木で作られた、長さ24.6メートルに及ぶカヌーをはじめ、マオリのすぐれた芸術品の数々が展示してあった。それらのうちのどれ一つを取っても、マオリの芸術がデザイン及び作風において、極めて優れていることを示していた。

このように、原住民の遺産が大切に保存され、展示してあることについては、ニュージーランドで訪問したどの学校においても、マオリの挨拶や民族舞踊で歓迎してくれたこととあわせて好感が持てた。このことは、ニュージーランドにおいて、“人種差別はいけなないのだ、また、この国を作った人達、そして、この国を守り育ててくれた先祖の人たちがいたからこそ現在の



巨鳥“モア”の複勢標本

私たちが存在できるのだ”という教育が実践されているものと思われた。

この博物館には、これらの他自然系展示として、動物植物を集めた博物室がある。ここには、400年前に絶滅したといわれる巨鳥“モア”が、骨格標本とエミウの羽毛を用いて復元した標本として展示してあり、特に印象に残った。

今回の海外研修で、二つの博物館を見学し、多くのことを学ぶことができた。中でも、豊富な展示物には驚かされるとともに、これらの資料が、古くより国民共通の財産として蓄積され、大切に保存されていることに対し、深く感銘を受けた。

## 自然史部門参加報告記(1)

高山短期大学飛騨自然博物館学芸員 小野木 三 郎

今年の日博協部門別研究協議会は、庶務・自然史・歴史の三部門が、仙台市内で去る12月16日(水)～12月19日(土)に継続して開催された。17日(木)～18日(金)と開かれた自然史部門は、「日本の自然史系博物館の未来を探る」をテーマに、前日は、地学界・動物学界における最近の動向を主とした講演会と懇談会、2日目は、各館園からの話題提供と討議、また具体的事例として会場館の斉藤報恩会自然史博物館の資料整理状況についてと自由視察という内容であった。

開館してちょうど一年が経過したばかりであり、ささやかではあっても自然史博物館の仲間入りをした本館としても、「自然史博物館の未来をどう考え、どう歩むか」は最大の関心事であるし、植物専攻の私自身、自然の総合博物館の学芸員として、動物・地学分野も、とにかくひとりの専従職員としては、何でも屋たらねばならず、動物学・地学界の最近の動向と題する二つの講演も、自己研修に絶好のチャンスに思えた。以上二つのことから、なけなしのポケットマネーをはたいて、東北仙台まで自費研修に出かけてみた。専門的な動物学・地学界の最近の動向についての報告は、別の機会に譲るとして、ここでは、自然史博物館の現況・問題点として話し合われたことや、私の印象記などを報告し、大方の参考に提したいと思う。

## やっぱり弱少分野なのか。//

日本博物館協会で把握している博物館と称するものは、今や全国で2,600館にも達しているが、自然科学系は微々たる存在、総合博物館で自然分野をもつ館を含めても、一口で表現すれば、日本の博物館行政界全体の5%にすぎない弱い分野といえる。政治の世界、選挙とは違って、数が全てではないといえ、この現況は無視できない。自然史系博物館にも、どんどん金がかかれるようになってこそ、日本の文化も本物に

なってくるはずだが、今ようやくその明るい展望が見え始めて来たと思えそうだ。

そんな現状の中で、ご存知の方も多はずの「千葉県立中央博物館」(仮称)準備室からの参加者は、中央博物館構想のパンフレットにより全体構想を提示された。世界的な生態学者の沼田真博士等をトップ頭脳に、注目すべき新しい総合博物館のあり方が模索されつつあり、どの点をもても羨ましい限りである。展示内容は、あくまで千葉県内、房総の自然と歴史とするが、開館後の活動としての企画展、調査研究等については、自然史界に行政区画がないことは当然、広く活動の場を設けるとのこと。そのため、目下準備室段階で予算獲得のために考えていることのひとつとして、学芸員個人の研究調査、企画展実施のための研究調査、チーム・プロジェクトとしての総合調査のための研究調査と、調査研究費をこの三項目から確保するべく努力とのこと、私自身耳を奪われた。

一方、兵庫県でも、自然史博物館を建設する動きがあり担当指導主事の方が参加、二度、三度も来館してもらうために展示はどうすべきか、兵庫県内の自然史ドラマだけを対象でいいのか、自然史の舞台を、日本列島から世界にまで及ぼすべきか。また宮崎県総合博物館からの参加者は、展示替えと一新の計画づくりの段階での苦労、小中高の理科の指導に役立つ内容の展示を考えるべきか。ところが、300坪ほどの展示室改造に際しても、“自然は50坪もあればいい”という上層部の認識の欠如さ振り等も披露され、自然と歴史とを統合した展示を考えるには…との迷いを述べられた。自然史博物館の未来を考えるというよりも、切実な現状、現況をみつめる部門会との感が強かったが、総合博物館自然分野からの出席者が皆無に等しく、先人から学ぼうとして参加した人々には気の毒みたい、次回には、具体的な話し合い内容をお伝えする。

## 今、関東の博物館は(2)

岐阜県博物館 今井雅巳

先の号では、博物館における「ヒト」についてお伝えしました。今回は「モノ」を生かす展示について、関東の博物館の実践の一端を紹介しようと思います。

### 〈山種美術館〉

近代日本画の専門美術館として、1966年に東京は日本橋兜町の山種証券ビルの8階9階に開館しました。常設展のほか、毎年数回テーマを決めての特別展が催されています。ちょうど「富岡鉄斎展」が開かれていました。

鉄斎は我が国最後の文人画家とも言われ、最も人気のある画家の一人です。その作品は、中国の文人画がそうであるように、“万卷の書を読み、千里の道を旅した”のちに生まれたものです。中国の歴史・故事によったテーマの作品がほとんどで、しかも彼は“自画自賛”という形でその世界を描いています。彼の魂が遊んだ世界を知るには、それなりの知識と教養が求められます。これまでの「鉄斎展」では、作品の題名のみキャプションが多かったのですが、今回の展示では、自賛の読みが詳しく解説され、しかも背景となる思想・人物についても的確な紹介がなされました。しっとり落ち着いた会場の雰囲気とともに、鉄斎の絵の世界にひたることができました。この展示に対する学芸員の熱意と力量とがひしひしと伝わってきます。「モノ」が語りかけてくれる情報量は、受け手の能力により大きく異なってきますが、さりげなく開かれていた知的興味への窓口は、とても嬉しいものでした。博物館に帰って、我が館のキャプションを見直した時、腕組みをしてしまいました。

### 〈サントリー美術館〉

東京都港区元赤坂の東京サントリービル11階に設けられた都心の美術館です。

“生活の中の美”というメインテーマのもとで、様々な特別展が企画されています。今回は「日本博物学事始―描かれた自然―」が開催されていました。

博物学のもととなった、動物・植物・地学の珍しいもの、見知らぬものを「写生」した作品を一堂に会した展覧会でしたが、そこには学芸員の確たる信念・思想がうたがわれていました。

「……この展覧会の分類が当を得たものであるか、否か、余りに恣意的に過ぎるのではないか、との批判が出るかもしれない。しかし、これは敢えてそうした異論が出るのも覚悟の上で試みた分類である、とご理解いただきたい。と云うのも展覧会は、研究の一つの成果であると同時に、新たな出発でもあるからである。議論百出、百家争鳴こそがこの展覧に相応しい。そもそも展覧会とは、そのルーツをたどれば“見世物”ではなかったろうか。(略)見世物小屋においては、珍奇なものを眼のあたりにした折に、アーでもない、コーでもない、と、つぎつぎに話題の輪が広がっていくことこそ、観る楽しみの一つではなかったろうか。展覧会からそうしたざわめきとバイタリティーが失われて久しい。展覧会屋としては、もって銘すべきだろう。」

学芸員が自ら足でかせいだ研究成果を、このように堂々と表明できるのは素晴らしいことと思います。訳もなく、「国宝だ、重文だ」「世界にただ1つのものだ」と並べた展覧会からは、議論百出はおろか「ヘー」という感嘆の声さえあがらないのが、今日の目の肥えた来館者の実態であろうと思います。

確たる研究成果から生まれた、ストーリーのある展示。「モノ」のもつ様々な側面にスポットをあてた展示。それを成し得た学芸員の自信に満ちた様子が、会場全体からにじみ出ていま

した。学芸員の仕事とは、本当に奥深いものだと  
 ということを感じました。数年後には、パート  
 Ⅱが企画されており、既にその調査・研究が進行  
 中とのことでした。パートⅡが待ち遠しい限り  
 です。

〈群馬県立歴史博物館〉

「中国陝西省文物展」の展示レイアウト、キャ  
 プションの素晴らしさに目を見張ったことは先  
 にお伝えしました。会場の展示レイアウトにつ  
 いては、実際に会場で体験しない限り説明のし  
 ょうがありません。そこで、キャプションにつ  
 いてのみ、一例を紹介します。

必要な情報を、求める人の要求に応じて、確  
 かな気配りのもとに作られたキャプションです。  
 実物の写真は撮ることができませんでしたので、  
 館に帰ってからまねて作ったものが下の図です。

- ・「モノ」の名前は大きく、ふりがなを。
- ・日本の言葉での的確な説明。
- ・資料番号と時代

- ・出土地と所蔵地
- ・タテ10cm×ヨコ20cm

基本的な情報は、大きく読  
 み易く。高度な内容になる  
 につれて、必要な条件を具  
 備し、全体のバランスをう  
 まくはかってありました。  
 観る人の意志が尊重されて  
 いると言って良いでしょう。



このキャプションにより「モノ」たちは、と  
 ても雄弁に、中国の歴史を語っていました。

17 ————— 西周時代

どうてつもんせいどうしゃく  
**饗饗紋青銅爵**  
 青銅器・楽空の獣の顔を描いた酒器

出土：遼陽県高家堡 陝西省博物館蔵

キャプションの一例(実物は写植文字)

### 第9回会員研修会のお知らせ

本年度最後の会員研修会を下記の内容で開催  
 します。博物館人として最低限知っておくとよ  
 い内容です。多数の参加を期待しています。

期日 昭和63年2月23日(火)  
 午前10時～午後3時  
 場所 岐阜県博物館 研修室  
 内容 資料の梱包実技  
 講師 日本通運美術品課  
 沢田 貞雄氏

日頃、美術専門車部門で博物館資料の運送に  
 携わっておられる方です。実務の中から得られ  
 た本物の指導が期待できます。実習終了後、今  
 年度の会員研修会の反省会も予定しています。

— お願い —

参加される方は2月20日(土)までに協会  
 事務局まで連絡ください。電話 0575-28-3111  
 岐阜県博物館・今井、安藤

### 催し物案内

- 岐阜市歴史博物館  
 企画展 「美濃の南画」  
 3月5日(土)▶4月5日(火)
- 岐阜県美術館  
 郷土作家シリーズ4  
 「天衣無縫の芝居絵師・中川とも展」  
 2月23日(火)▶3月21日(月)
- 瑞浪陶磁資料館  
 縄文・弥生時代の陶磁資料陳列  
 開催中▶3月30日(水)まで

### 編集後記

- ◎ くすり博の青木館長より原稿が届く。く  
 すり博物館の未来構想を読み、博物館人と  
 しての意気込みを感じる。(S・A)
- ◎ 岐阜県の博物館史を調査しながら、協会  
 設立当時の苦勞を知る。ただ先輩に感謝。  
 今後、機会があれば掲載したい。(M・I)
- ◎ 各地域で博物館人として活躍されている  
 方の紹介をお願いします。(S・A)